



行 二十 日 三 月 日 癸

イワキサロニ

平町電三五二

お願ひでござります
ヤマトは今こそ壊の切れ
ひなさるゆゑ其のやうに申
たやうに、斯う言ふなり、さ
れるのでございませう

足な戀の對象もなく、界隈
の村人からは、異端視され
て、空しくこの山塞に處女

さるヤマトに對して、感謝す
るヤマトは、泣き聲になつ

たやうに、斯う言ふなり、さ
れるのでございませう

そのまゝよと泣き伏して懸命に言ふ

「ヤマトどの、そなたの氣

持ちはよくこの平七郎にも
刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延長した戀心を、

一つの手は、ヤマトの右

腕を取り、他の手で、その

持ちはよくこの平七郎にも

刺つてゐるが、しかし誠

るヤマトは、泣き聲になつ

て、いたはりながら闇の中

に氣の毒ながら、拙者も

の念から延

